

身近二題



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

最近思わぬ体験をした。今年の四月と五月は風邪をひいて、三十八度の熱を出し、その後の咳とたんのひどさに、体中の力が抜けて脱力感から立ち上がるのに、時間がかかった。新緑の美しい季節なのに庭に出ることもできず、これが老いることかと暗澹あんたんとしてすごした。そしてまだ完全になおらないのに、入浴して再度発熱、五月もやりすごした。

その後は、娘の嚴重な見張りで六月は何とかたんも咳も治まったのである。その間、実にいろいろな夢を見た

が、つい最近熱のために体中が張れた感じしていると、口中の奥歯の一本が浮いて痛い。いやな痛さでうづく。ものを口に入れても噛めなくて痛まない片方ばかり、それもやつとの思いで嘔んで飲み込む状態になった。

いつも舌は痛む処を気にして、疲れてくる夕方は特に痛んでくる。

その夢は、老人の歯医者さんが何とその痛む歯をきれいに抜いてくれるという内容で、その嬉しさと、体中のしこりが溶けた開放感を感じて目が覚めた。

現実はやはり痛む歯はそのままであった。私の歯医者さんは予約制で、下の娘が予約してくれる。風邪の為何度も予約をキャンセルしたが六月十九日ようやく行く事ができた。

先生は二代目で一代の方が早く亡くなられたので、若先生は今でこそ壮年だが、大変だったことだろう。

老人には特に優しい人で、私が奥歯のことを訴えると、ゆつくりゆつくり時間をかけて治療して下さり、私は只口をあけて何をされているのか分からなかったが、「終りましたよ」と言われたら、夢の中と全く同じに、かぶっていた金冠がはずされて、痛んだ歯は消えていたのだった。「本当にありがとう」と言うと、先生は「この金冠は父親がかぶせたものだから、壊さないように少しづつ削ったんだよ」と仰言った。目の前にはずされた金冠が光っていたのである。全く夢と同じ口中の開放感であった。

娘に話すと、「それは予知夢よちむひといって、そんな言葉があるくらいだから、

よくある事らしいのよ」と教えてくれた。何でも食べられる喜びと口中は宇宙のごとく広く感じられるようになったのである。予知夢は勿論嬉しいことも悲しいことも起こり得るだろうから、私の場合は、楽しい予知夢で幸せであった。

次のことは曾孫の運動会の話で、四歳になった彼は四月から保育園に入園することができた。保育園はなかなか入園がむずかしくて、孫は、いろいろな資料や手続きをして何とか入園することが叶ったのだった。

五月には、運動会があった。そんなに広い園庭でする運動会は、祖母を混えた見物客で人が溢れたらしい。行かない私の為に、孫はその有様を映像にしてテレビに写し私に見せてくれたのだ。

その日は、早朝から近県に住む孫の連れ合いの母が来て下さったおかげで、何とか前の方にビニールを敷くことができたらしい。

何をするにも、四歳児は中途半端で

ちぐはぐである。家の曾孫も赤ちゃんことばを一度も言わず、スマホで遊ぶのが大好きな都会っ子で、ついこの間までおしめのパンツしていたのに、言うことはいっぱいだ。娘のバアバに対しては下男の如くえぼり、「ママが一番すき、バアバは○番だよ」などという生意気で、背が高く頭大きく、宇宙人のようねと娘と二人で笑っている。さてその運動会で踊る歌が又大阪弁の面白い歌詞で、「海賊のうた」という題だという。

「海賊は頭よくなっては、あかん

海賊は力強くなっては、あかん

彼は家に帰ってきて、その歌を私にも唄ってくれた。踊りは見せてくれなかったが、その映像の中では、それぞれがまことに勝手に手足をうごかして、とても踊りなんかではなかった。家の彼は一人で好きな処にゆく。時々みんなが手を上げれば手を上げるというひどいものであった。

かけっこは園庭が狭いので、ぐるり一まわり廻るようになっていて、二人

ずつが走った。

彼は、あまり早くもないのに瞬発力の助けて飛び出しが早く見事一等となった。

球入れが又変っていて、球を入れる度に、アフリカの歌を踊ってから投げるという幼児むけの競技になっていた。チエツチエッコリという掛け声ではじまる踊りは腕組みしたり腰を振ったり、自分の股をたたいたりする。それから球をとって投げるのだが、いかにも腕の力が弱くてほとんど入らない。たまにまぐれで入るが保育師さんが手を貸して、ようやく両方にいくつか入り、同点であった。両親も参加するのもあり、午前中で終わった。珍しいものを見るように私は楽しんだ。顔の整って色白の彼は、私を皆が呼ぶ様に「お母さん」と言う。夕飯のあといつも、キャラメルを右手に「どっちに入ってるか」をするのが私の役目の一つだ。一日の憂いも消えて近づくと彼の姿を眺めている。

古い本のなかから新しい発見

宮地 智子
(詩人)



母の遺品の着物や茶道具は、四・五年の間にか片づいたが、父の遺品の蔵書に関しては、死後二十五年経ったいまになって、ようやく片づけつつある、といった状況である。

それは何故か。書物はまず中味を読んでからにしたいと思ったからである。それでも二十五年の間には数回、思い切って捨てた本もある。破損や汚れの、目に余るものや、タイトル名から判断して、これは絶対に読むのも嫌だ、といった数冊である。そのうちのひとつは、『毛沢東語録』、もうひとつ

は、林房雄著『大東亜戦争肯定論』である。

この二つのうち、最近になって本屋で目に留まったものは、前者ではなく、後者であった。二〇一四年発行中公文庫版『大東亜戦争肯定論』である。初版上巻のあとがきが、昭和三十九年七月、初版下巻のあとがきが、昭和四十年四月、とあるから、戦後二十年、今から五十年前に書かれた本である。父の残した本を、ろくに読みもしないで捨ててしまったことを後悔してい

た私は、再販されたその本を買って読んでみた。目から鱗が落ちるとは、まさにこのことだ。戦後生まれの私にとって、学校では習ったことのない幕末から、第二次世界大戦の終戦までの歴史が明らかにされていて、しかも著者の歴史の見方には日本人としての血が通っている。私は深い感銘を受け、自分自身の無知を恥じた。

ところが、保阪正康氏の解説によると、昭和二十年代、三十年代にあって唯物史観的解釈に基づく太平洋戦争史観が優勢だった頃この『大東亜戦争肯定論』は特異な存在とされていた、とある。実際、保阪氏は、当時、一読するや、右翼的体質のおぞましさを、自省なき歴史観の集積といった威を受けた、と告白している。これは、今、私が『大東亜戦争肯定論』を読んで受けた印象とは全く異っている。

さて、『大東亜戦争肯定論』では、真珠湾奇襲とマレイ沖海戦にはじまる戦争を「太平洋戦争」と呼ばずに、「大東亜戦争」と呼びそのほかに、幕

末の、ペリー来航より数年遡ること弘化二年（一八四五年）の米国使節ビツトルの浦賀入港から始まる百年間の戦争を東亜百年戦争と呼んでいる。そして、苦難にみちた「東亜百年戦争」を雄々しく戦いぬいた日本人の誇りと自信をとりかえすために、この本を書いた、と、初版下巻のあとがきで述べている。

さて、阪阪氏が感じた右翼的・体質的・おぞましさと、一体何ものだろう。もしかしたらそういう感じ方こそが、片寄ったものの考え方による感覚なのではないか、と私は思うのである。私
が、この『大東亜戦争肯定論』というタイトルのおぞましさから、内容も読まずに捨ててしまったという、その行為そのものが、われながら偏見によるものではないかと思う。恐らく私もまた、唯物史観的解釈に基づく太平洋戦争史観に支配されていたことになる。それは時代の風潮といったらいいだろうか。阪阪氏の解説によれば唯物史観とは（この戦争は帝国主義間の市場争

奪戦であり、民主主義とファシズムの戦いであり、そしてブルジョワ階級に対してソ連が参戦することでプロレタリア階級の抵抗運動があり……）というような見方であったという。国際情勢の変化とともにその考え方は修正せざるを得ないが、戦後七十年になる現在でもなお、私たちの心の奥底に、日本軍はアジアで悪いことをした、という罪悪感が根強く残っているような気がする。それに加え、いつたん、インブットされたそういういった感覚は、容易に変えることができない。人間とは、悲しいかな、そういうった性質の生き物なのである。

連合国軍総司令官（GHQ）の「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム（WGIP）」による、日本人への、戦争に対する贖罪意識を植えつける政策は、新聞、雑誌、ラジオなどへの検閲により、日本人の心の奥底に浸み渡った、ということ
は、文芸評論家江藤淳の著作などによつて容易に推定できることである。

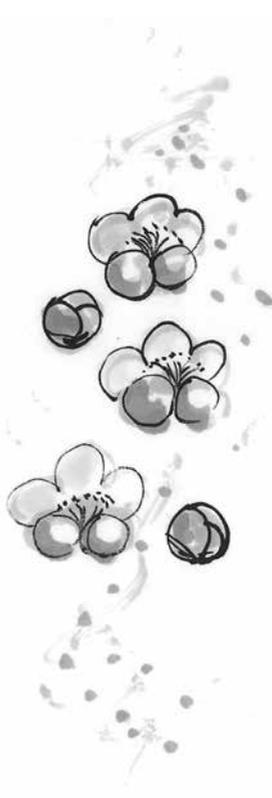
ごく最近のS新聞の記事によると、その、占領下の日本国民に対するGHQの贖罪意識植えつけの政策は、中国で中国共産党が野坂参三元日本共産党議長を通じて日本軍捕虜に行った洗脳工作の手法を取り入れたものだったことが判明した、とある。それは、英国立公文書館蔵の秘密文書「ノーマン・ファイル」（KV2/3261）のなかに見られるという。二分法という毛沢東の理論を戦後日本に取り入れ、「軍国主義者」と「国民」を対立させ、国力を殺ぎ、日本民族から独立心を奪い、精神を破壊して日本人に自虐史観を植えつけ、アメリカに二度と歯向かわないようにした、という外交評論家の加瀬英明氏の解説も、傾聴に値する説である。

私は思う。右派も左派も、日本という国が安泰であつてこそ、自由が言えるのであるのだから、国の防衛は怠つてはならないのであると肝に銘ずべし。

本法寺——夏目漱石ゆかりの寺——

志^し村^{むら}有^{くに}弘^{ひろ}

(相模女子大学名誉教授)



たことを思い出したりする。やはり、花は寺に似つかわしい。

本法寺本堂に向って左手に「梅の花不肖なれども梅の花」と刻まれた夏目漱石の句碑が建っている。ここは漱石ゆかりの寺。漱石句碑のそばに江戸時代の石佛がいくつか見られ、寺の歴史の古さを実感する。

本法寺の山号は高源山。寺の歴史は室町時代に遡り、開山は本願寺第八世蓮如上人。蓮如が近江国堅田（現在の滋賀県大津市）に創建し、本法院称徳寺（慈敬寺）と号したのが始まりだといふ。その後、正親町天皇から院家に勅許され、寛永四年（一六二七）、住僧教映が本願寺宣如の命で寺基を三河国大塚に移して本法寺と称した。それからおよそ七十年後の宝永二年（一七〇五）、江戸の小日向に移転する。『江戸名所図絵』にも本法寺の堂宇を見ることができ、嘉永五年（一八五二）の「江戸切絵図」に「本法寺」の名が見える。

右に漱石句碑の存在を示したが、夏

東京の文京区小日向界隈は、歴史・文学の散策するには楽しい場所である。寺が多く、歩いていて、ここは寺町通りかと錯覚を起こすことがある。切支丹屋敷の跡地もある。

本法寺（ほんぽうじ・東京都文京区小日向一丁目。浄土真宗・大谷派）は、いつもきちんと境内が調えられ、

とりわけ春には、源平桃、しだれ梅が美しく咲いて、心を和ませてくれる。日中、断りもせずに入って本堂の横に腰をおろしてほんやりしていると、墓石が並ぶ小高い場所から流れてくる風が、心優しい気持ちにさせてくれる。そうして、先年、訪ねた北海道稚内市の寺の境内に藤の花が美しく咲いてい

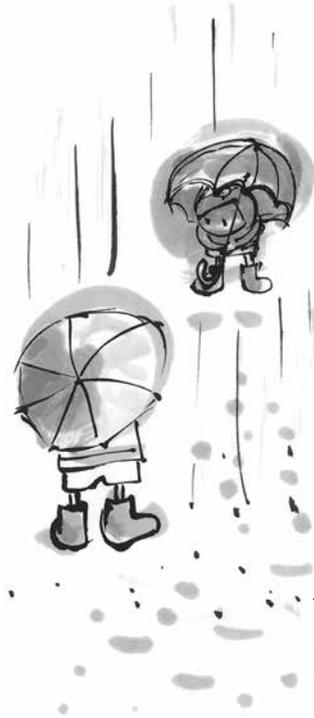
目漱石の菩提寺としても知られ、明治十四年（一八八一）一月に漱石の母、同二十年三月に長兄、同六月に次兄がここに葬られた。名作『坊ちゃん』の末尾に「清の墓は小日向の養源寺にある」と記されているのは、本法寺のことである。それが「梅の花不肖なれども梅の花」の句碑建立につながってゆく。寺宝として嚴如上人形見の掛物『詠十首和哥』、寛永十二年の年号が記されている「堅田同上勅號本法蘭若」と記された勅號掛額が残る。この額の本来の物は織田信長が近江攻めをしたときに焼失したが、現在伝えられている額には、願海（日光執事院家権大僧都法印）が日光座主の尊命を蒙り、教映大僧都法印に囑した由が記されている。日光座主（公海上人）とは教映の従兄弟にあたり、天海のあとを継いだ人物。このあたりのことは本法寺から聞いた話で、メモしておいたものだ。

一三〇一）から六代目の子孫。文明期歌壇の中軸的存在であった。寛正七年（一四六六）二月五日に権大納言に任じられ（数えの五十歳）、文明五年（一四七三）十二月十七日、五十七歳のおりに出家し、法名を榮雅と名乗った（『公卿補任』・『尊卑分脈』）。本法寺には、嫁よめ脅しの面にまつわる江戸時代の掛軸があり、鬼の面を付けた姑が嫁を脅している絵で、左側に蓮如がおり、「それはいけない」と姑を諫めている絵である。本法寺の僧が絵師に書かせて、絵解き説法をしていたものであろうか。姑の衣は蛇の鱗のように見え（？）これは『道成寺縁起』の清姫と同じく女の怨み、怨念を表わしているのか、と考えたりする。

本法寺は、いつ訪ねても住職ご夫妻の心優しい対応に嬉しい気がする。蓮如にまつわる鬼の面の掛軸を見せただいたのも、偶然、境内で住職と言葉を交わしたとき、内陣に案内され、拝観させていただいたもの。文政年間の御判帳（現在の御朱印帳）の写しも見せていただいた。江戸時代、某家の先祖が著名な寺院を歩いて御印を押して貰って歩いてきたおりのもので、その中に本法寺の御印もあった。興味深かったのは、本法寺の寺名の部分が版木で押されていたことである。現在と違って江戸時代、あるいはこのあたり一帯の寺院がそうであったのかも知れないが、本法寺は参詣者から求められたとき、参拝記念として版木を押していたものであろうか。御判帳一つにしても、思いがけない歴史の世界に遊ぶことができる。

寺社は、訪れる人たちに安堵の思い、安らぎの気持ちを与える場であることが望ましい。私の場合、多分に歴史・伝説・文学探訪趣味と関連しているのであるが、寺社があれば入り込んで、歴史や建造物を確認しようとする悪癖がある。たとえ、寺社の人がないであっても、境内を歩くと、そこに住む人の心の有り様ようを伺うことができ。本法寺は人の心を和ませ、優しい気持ちにさせてくれる寺である。

雨の歌を探す



片岡義男
(作家)

雨の日の午後には喫茶店で待ち合わせ
た人が、一杯のコーヒーのあいまに、

「雨の歌は日本にいつ頃からあるの
かしら」

と僕に訊ねた。

昔からあるだろう、と僕は思った。

しかし、漠然と昔と言っていては、な
にごとも始まらない。

「大正時代にはあるよ」
と僕は答え、

「子供の歌として」
と、つけ加えた。

子供に向けた歌の素材として、雨を

採り上げて見事な詞をつけた詩人は、
大正時代にはいたはずだ、と僕は思っ

た。確かな根拠はなにもなかった。な

んとなくそう思った。

調べてみたら、大正八年に、『雨』

という題名の歌が、子供に向けられた
ものとして、発表されていた。北原白

秋が詞をつけ、弘田竜太郎が曲をつけ
た。「遊びに行きたし 傘はなし」と
いう部分を、かつてはじつに多くの人
たちが知っていた。おそらく子供の
頃、僕も二度や三度は聞いたことがあ
る。

大正八年。一九一九年。存分に遠
い。どんな時代だったのか、なにひと
つ知らない。東京駅が開業したのが
大正三年だった。夏目漱石が没したの
が大正五年だ。『四季の雨』という歌
が、『尋常小学唱歌』という音楽の教
科書の、六、つまり六年生のものに、
収録された。作詩・作曲は不詳とされ
て来たが、一説によればすでに特定さ
れている。日本に降る雨の印象を四行
の定型詞に抽象化した、たいへん良く
出来た歌だ。いまの、そしてこれから
の、日本人のための日本語の教科書、
というようなものが編纂されるなら、
『四季の雨』はそのなかに加えられる
べきものだ。『四季の雨』が『尋常小
学唱歌 六』に収録されたのは大正三
年のことだった。

大正六年、一九一七年には、『雨だれの歌』という歌が、レコードによる歌劇、『雨だればつりさん』の主眼歌として作られた。作詩・作曲は北村季晴だ。大正八年には、すでに書いた『雨』があり、五年後、大正十三年、一九二四年には、『雨だれ』が作られた。いかにも大正時代の子供の世界だという。作詩は葛原幽、作曲は小松耕輔だ。

次の年の大正十四年、一九二五年には、野口雨情の詞に中山晋平の曲で、『雨降りお月』が生まれた。歌詞の一番が『雨降りお月さん』という題名で一月に、そして二番の歌詞が三月に、『雲の蔭』という、ともに『コードモノクニ』に発表され、三月にひとつの歌にまとめられたとき、『雨降りお月』という題名になった。

おなじく大正十四年には、『あめふり』という歌も作られた。下校時に雨が降り始め、母親が唐傘をさして学校まで迎えに来てくれたうれしさと、雨のなかを母親とふたりで帰っていく楽

しさと、失われて久しく、しかも二度とあり得ない日本が、この歌のなかにある。雨のなかをふたりで歩く楽しさが、

「ピッチピッチ チャップチャップランラン」と表現され、かつてはほとんどの人たちが、日本人が知っていて当然の、大事な基礎知識のひとつとして、メロディとともに知っていた。

子供に向けられた雨の歌は、思いのほか少ない。子供に向けられたと言っても、詞とメロディの良さは年齢などたやすく超越してしまうから、日本人全員に向けられた歌だったと言っている。しかも日本は雨の国なのに、雨を歌詞にしてメロディに託した歌が、こんなに少ないとは。しかも、ともう一度言うけれど、これらの歌はいまですっかり忘れ去られ、ただ資料のなかに埋もれているだけだ。

昭和の時代に、子供に向けて作った雨の歌はないものか、と資料のなかを探したら、ひとつだけ見つけた。

『あめふりくまのこ』という歌だ。昭和三十七年、一九六二年の作品だ。作詩が鶴見正夫で作曲は湯山昭だ。僕は資料のなかにこの歌を見つけるまで、知らなかった。一九六二年の僕は大学生だった。単なる大学生をはるかに越えて、馬鹿そのもののような日本の大学生だった。

一九六二年のNHKは『うたのえほん』というTVの幼児番組を放映していた。六月の歌として放映する予定の歌詞に、湯山昭はメロディをつけようとして苦心していた。この歌詞ではメロディはつかない、とまで湯山は思った。鶴見が作った歌詞だった。放映の二週間前に、この歌詞では無理だとNHKに伝えた湯山は、二、三日後、鶴見が作ってそのまま埋もれていた別の歌詞を、NHKから電話で伝えられた。電話で読み上げてもらっているうちにメロディが浮かび、それから一時間後には完成していたのが、『あめふりくまのこ』だった、という経緯を資料のなかに読むことが出来る。



香川に伝わる伝統工芸品

香川の家具

香川県には、さまざまな技が伝えられている。讃岐漆器の繊細な技、庵治石を割るダイナミックな技。そうした技の一つに家具づくりがある。海運が盛んな江戸時代は、船大工の技も磨かれたことだろう。

そうした技を受け継ぎ、家具づくりは戦後の香川県で急成長を遂げた。中でも、世界的な家具作家の作品を手がける桜製作所は、見事な技を伝え続け、デザイナーの感性と職人の技の融合を美しい家具で見せてくれる。



職人の手仕事で生まれる驚くほど均一な部材。この部材を組み合わせ、次々と完璧な家具が生まれる。





桜製作所の創業は1948年。それ以来、職人の手作りにこだわり続けてきた。その確かな技に世界的なアーティストたちが惚れ込み、次々と名品を生み出している。東京都立現代美術館や第二国立劇場のカウンターやベンチも桜製作所の職人が手がけたものである。



三つのこだわり

世界的家具デザイナー、ジョージナカシマ氏らの作品を手がける桜製作所。その代表取締役社長、永見宏介さんにお話を伺った。

桜製作所が創業以来大切にしていることが三つあります。

一つは、人の「手仕事」にこだわるといふこと。製作の要は、あくまで職人の手仕事です。



二つ目は、「木の心」を読み取るといふこと。それぞれの木は、その個性や性質から、その木にふさわしい役割というものがあります。二つつの木に真摯に向き合えば、その木がなるべきものが見えてきます。

三つ目は、デザイナーや建築家などのパートナーシップ。世界的に活躍する専門家の方々の高度な美の要求に応えることで、さらなる技が磨かれます。

こうして「人」と「木」と「美」にこだわり、日本の伝統工芸を踏襲しながらも、新たな感性で世界に挑戦する木工会社でありたいと願っています。





ナカシマ氏が日本とアメリカ双方で制作した約60点の作品が所蔵されている。

世界でも貴重な ジョージナカシマ記念館

桜製作所の本社工場には、ジョージナカシマ氏の記念館が併設されている。日系アメリカ人で世界的な家具デザイナーであるナカシマ氏。桜製作所は、彫刻家・流政之氏が中心となった「讃岐民具連」に参加。その縁で、ナカシマ氏の指導のもと、木に接する姿勢、木工の理念を学び、ジョージナカシマ家具のライセンス生産が始まる。

ナカシマ氏が世界で唯一その技術を認めた桜製作所は創業60周年を記念して、2008年に記念館を設立した。アメリカにあるニューホープの工房以外では、ジョージナカシマ氏の作品を鑑賞できる場所として、世界で無二の記念館である。



家具だけでなく、温かい木の手触りがうれしい小品の展示販売も行っている。



アパート



佐川毅彦

う。気分的にゆとりができたので、父の残したアパートを見にいった。築三十年四つも空室があり、前から気になっていた。階段が所々傷んでいる。玄関のドアの塗料は、はげ落ちていた。室内を見るとさらに驚いた。

床は板がめくられて、壁のクロスは破れはがれてカビている部分もある。畳はすべて取り替えになりそうである。窓ガラスはヒビ割れていて、アミ戸はアミのない物や破れている。その他にもダメな所がいろいろある。とにかくのんびり絵を描いている時ではない。なんとかしなければと業者のリフォームの見積もりを出してもらった。三社共かなりの高額であった。できない所は業者に頼むとして、あとは友人に助けてもらうことにした。

電気関係や台所・トイレの水回りなどは中山がやってくれる事になり、毎日のように来てくれてとても助かった。しかし一と月もすると来なくなつた。トイレのドアを作ってもらつた崎原は、なんとかドアは取り付けてくれたがくもりガラスのはめ込み部分を残したまま来ない。

崎原の弟のペンキ屋の守はドアの塗装をやつてもらふ事になつてゐるのだが一度も来ない。何度か電話したのだが、電波のとどかない所にいるか電源を切つてゐるといふ声しか流れてこない。中山と崎原にも電話してゐるのだが二人共電話にでない。しょうがないのでペンキ塗りは私がやつた。

そろそろ六月も終わりに近づいて来た。絵画展があるのであとは管理をまかせている不動産屋になんとかしてもらふ事にして、私は創作活動を再開する事にした。

七月二十八日から沖繩の那覇で絵画展をやる。今回はかなりいい作品ができつつある。今四月だから、のんびり仕上げをしても充分間に合

じょうずへた 上手下手



志
村
栄
至

(栄守改め)
(評論家)

これは、今年に入ってからのお話だが、会話の中で、「小林秀雄って何ですか？」と聞かれて、つくづく時代の変遷を感じてしまった。と言うことは、あれは既に遠い昔の出来事と回顧せざるを得ないらしい。

高校の国語の授業でのことだ、異色の先生ではあったが、こう言い放った。「日本で一番、頭が良いのは丸山真男（＝政治学者）と小林秀雄。」

国語科の先生で、理数系という分野は視界に無かったとしても、ずいぶん乱暴な言葉ではある。しかし、その時は、そんな風には思わず、すこぶる興味深く聞いた。そういう時代だった、と云うべきなのだろうか。

そして今、時代は変じ、ニュースが報じる事件、事故の相貌は、明るい話題と反比例するかのようになり、その深刻度を増している。私的な見解に固執するが、小林秀雄の思想といよいよ無縁な世の中となりつつあるようだ。

受験の話題その他で、かろうじて小林の名を見つけると、判で押したよう

に、『徒然草』とか『無常といふ事』とある。この人には、それ以外にも私達を心から魅了する、生きるうえでのヒントを蔵した作品がある、これと言いたい。

しかし、スピーディーに変化を遂げるこの時代では、悠長なことは言つてられないと思われるので、小林自身が自らを明らかにしているところが、『レオ・シエストフの「悲劇の哲学」』にあるので紹介する。やや長い引用になるが、諒解して戴きたい。

「最近、リアリズムに就いての論議が活発である。論者等の説はまちまちだ。個人的人間を描かず社会的人間を描けと説くものもあるが、分析に走つて総合を忘れるな、普遍と個別との総合を心掛けよ、描写に止まらず構成を得よ、等々の論説、すべて首肯するに足りる。ただ作家（＝著者を指す）に斉す実益が疑問なだけである。これらの説はすべて中庸を得て社会の進歩と歩調を一にしてゐる処をその特色とする。僕も又、矯激な説をなさうとは思

はぬ。僕はただ強い疑惑を抱く。何故に作家のリアリズムは社会の進歩なるものを冷笑してはいけないのか。作家のリアリズムとは、社会の進歩に対する作家の復讐ではないのか。復讐の自覚ではないのか。人間文化の持つ、強烈な一種のアイロニーではないのか。現存するあらゆる愚劣、不幸、苦痛を、未来の故に是認することを肯せぬリアリズムの精神の上に、果して社会の進歩が築かれ得るか。」

さて、そもそも人間社会は、各人それぞれが別々の過去という「時間」を秘めつつ、この事実をほぼ無視することによって成り立っている。「社会の進歩」ばかりに目が行くが、この矛盾は、社会に噴出する機会をうかがっているかも知れないのだ。今、日々、報道される事件の異様に、それを見る気がしてならないが。

小林の叫喚は、誰もが隠し持つ私的「過去」とか記憶という領域への興味、関心を促さずにはおかない。ベルクソンの『変化の知覚』にある、「生

き続ける過去」という文言との邂逅は、その中でも突出して刺激的だ。

今回は、小林がこの先人から具体的にどんな影響を受けたのが垣間見られる貴重なところを、『ナンセンス文学』から引く。

「時間も、空間も心も物も一切ひっくるめて自然といふ一つの持統体として、この世を理解したベルクソンは、（以下略）。」

「生き続ける過去」という逆説を意識しつつこゝを読むと、私達は、常識が避けて通ることが多い。「時間」の認識に関心を払い、あるいは通曉すべきかも知れない。

仮りにだが、家族間での心の通い方がいまひとつ満足できない、のような負の記憶を心に感じつつ日々を過していったら、小林『私の人生観』の以下に、注目すべきであろう。

「この場合、私達は過去を作り直してゐないとは言はぬ。過ぎた時間の再構成は必ず行はれてゐる（以下略）。」
少し後の『年齢』では、このように

も書いている。

「過去を思ひ出す、上手下手といふ事があるのだ。上手に思ひ出すとは過去が見えて来る、或る形として感じられて来るといふ事である。」

別言すれば、負の記憶を正の記憶へと転換させる行為、人間は自らこの努力を重視すべきと言われている気がする。しかも、これらの言葉は、いつの日か、この世をより良く生きるための人生訓とまで上昇して驚かせる。

それは、初期の『手帖』のことも係わる。

「ほんの聊かな先入主が、どれほど動かし難い精神の型を作つてゐる事か。」

私達の生きる日々刻々は、人生の機微を捉える自らの感性に大きく左右される。「先入主」が厭なことと思ひ込んでしまうと、その人生が悪い方、悪い方へと引き摺られてしまい、苦しい自問にさいなまれるものだ。

こんな時、私的「過去」とか記憶への配慮を大切にしていると、小林『私

の人生観」の「現実畏敬の念」という言葉が生命を得るかのよう働き掛けて来る。ただいまの苦難は、私的「過去」に「生き続ける」失態あるいは過失を、もう一度やり直す為の機会を頂戴しているのではないか、と思えて来ることだ。

つまり、人生は重層)にできているのかと驚くとともに、「畏敬」の含意が浮上して来る。

